

夏季大学講座

「心の居場所の大切さ」



フリージャーナリスト・少年犯罪研究家

春日 美奈子 様

駅の改札口の七夕の短冊に「一人の人間として扱ってほしい」と書かれていた。社会が希薄になって、人が人として生きづらい世の中で、大人や子どもが居場所を求めて漂流しているようだ。

一 夢、そして心の居場所

校長先生になりたいという夢が百八十度変わったのが小学校三年生の夏休み。NHKのアナウンサーが、研修会の講師としてやってきた。生きた言葉が話せるようになりたいと思った瞬間に、アナウンサーになりたいという夢が変わった。「自分の夢を他人に話したら実現しない」という中国のことわざを信じて、その夢を大学までずっと温め続けてきた。自分の夢は揺るぎなかった。

大学卒業後、群馬テレビに入社、翌年テレビ静岡に入社し直し、キャスターになった。地方局のトップの座だったが、私はもともと上を目指し、テレビ東京のニュースキャスターに抜擢された。

しかし、キャスターはサラリーマンで、自分の意見を言う立場にはなく、歯がゆかった。専門分野を学び、責任をもったことを言えるようになりたいと思い、大学院を受験し、刑事政策と少年法を専門に学んだ。

人を愛すること、大切にすること、人との絆の深さを、父と母との生活の中で教えられた。故郷でしっかり守ってくれ

ている父と母の存在が心の居場所としてあったから、私は自分の好きな道を迷いもなく歩んでくることができた。もう一つの心の居場所は、夢、そして目標。高い山があったら登ってみようと思った。夢があったから、そこを心の居場所として頑張ることができた。

二 心の扉は内側に取っ手がある

マスコミの世界では、子どもの問題を取材することが多くなった。「十五歳の旅立ち」という番組を創った。当時は「一人親だから犯罪が起きる」という偏見があった。「両親がそろっていても犯罪は起きる」ことを、映像を通して伝えたかった。

取材を通して、教護院（児童自立支援施設）の存在が重要だと感じた。この施設にきた様々な背景を背負った子どもたちは、社会、大人を信頼していない。心を開くのは大変だが、「小舎夫婦制」といって、寝食を共にする疑似家庭で教育を受けることで、人を愛すること、人から愛されること、人を信用することを知らせる。その中で、自分が行ってきた問題行動を自発的に克服していく。

犯罪者として産声をあげてこの世に生を受ける人はいない。生を受けて成長する過程で、何かがきっかけで道を曲げていく。問題行動を起こしたり悩んだりしている子どもの側に、正しい方向に明か

りを灯してくれるしつかりとした大人、SOSをキャッチする大人、耳を傾けて聞いてくれる大人が一人でも存在していたら、道をはずすことはなかったのではないか。

子どもが大きな事件を起こすと、厳罰という言葉が出てくるが、抑止力にはならない。なぜそういう行為を行ったのか、深い暗闇の部分を探らないと、同じような犯罪は起こる。時間をかけてゆっくりと向き合う中で、子どもが自発的に心の扉を開いて自分の気持ちを話せるようにすることが大切である。「心の扉は内側に取っ手がある」心は開くものではなく、開かれるものだ」という言葉がある。自発的に「悪いことをした」と悔い改めるような心づくりがとても大切。

三 大人が凛と立てば

子どもたちがどんな花を咲かせ、どんな実をつけるかは、側に寄り添っている大人との接し方によって違ってくる。大人が変わることが大切。

子どもの心が分からない、子どもが変わったと言うが、変わったのは大人の方ではないか。大人自身も居場所を確保すること、一生懸命生きること、精一杯で、子どもの方に目が行く余裕さえない。大人が生き甲斐をもって生き、子どもの前にしつかりと自信をもって凛と立てば、子どもは、その姿を見てそうなりたいたいと思う。大人が自分の生き方をしつかりと見せる必要がある。

四 洪庵の松明（たいまつ）に学ぶ

江戸の蘭学者、緒方洪庵は、あふれるばかりの才能を、利益や名声ではなく他人のために使った。「適塾」を開き、自

分が恩師から受けた知識、松明の灯を一人一人に惜しみなく映し続けた。弟子たちは、松明の灯をさらに燃やし続け、それぞれ分野において大きな松明の灯りとして燃え続けさせた。それがやがて大きな炎、近代の灯りとなった。教育というのは、こういうものではないか。

先生方が教えているのは、可能性をもった子どもたち。それぞれ原石をもっている。そういう子どもたちと付き合えるのは、本当に幸せではないか。

五 心は青春のまま

教え子たちが、「先生も一生懸命生きてるから、僕たちも頑張ろう」と思ってもらえるような人間でありたい。道に迷って大きな壁にぶつかったときに、「先生に話をしよう」と思ってもらえるような心の居場所、港になりたい。そのためには自分が一生懸命生きなければならぬ。自分が幸せでないと何も言えない。魂が泣いていたら、人を助けることも自分がしつかりと生きることができない。

人間は、身体は歳を重ねる毎に老いていく。しかし、心は老いてはいけない。絶対曲げてはいけない。歳をとっても若いころの気持ちをいつも心の根底に置いて、今、生きている。私も、今、夢の途中。身体は老いてきたが、心は全然折れていない。

人を育てることは本当に大変なこと。教える側、育てる側の大人の心が健康であることが一番大切。いつまでも心は青春のまま頑張っていたきたい。

(文責 山田 哲哉)